

第198回 愛知学院大学モーニングセミナー

没後100年

「今・ここ」で読む森鷗外

—『雁』と『渋江抽斎』に見る作品の現代的意義—



中京大学 教授 酒井 敏

2022年9月13日

1. 森鷗外は医者？

鷗外森林太郎は、文久2(1862)年に津和野藩の典医だった森家に長男として生まれ、大正11(1922)年に亡くなりました。

よく「医者と小説家の二足の草鞋を履いた人」と言われます。まず、そのイメージが正確かどうか、確認してみましょう

明治14(1881)年 東京大学医学部卒業(7月)

陸軍軍医となる(12月)

→単なる「医者」ではなく「軍医」しかもキャリア組

(豆知識)「靴？ 屐？」(22年)=医学エッセイ。

日本で初めて外反母趾の害に言及した文献とされる。

2. 森鷗外は小説家？—その1—

「小説家」？

明治22(1889)年 訳詩集「於母影」を『国民之友』に発表

『しがらみ草紙』創刊

明治23～27年 戦闘的啓蒙活動の時代

→小説は「舞姫」「うたかたの記」(23年)

と「文づかひ」(24年)の3作のみ

→訳詩集から始まり、翻訳・評論(医学や美術関連含む)
が中心

→「紅露逍鷗の時代」でも一般の認識は翻訳家・評論家



2. 森鷗外は小説家？—その2—

明治27(1894)年 日清戦争従軍

32～35年 小倉赴任

37年 日露戦争

40年 『うた日記』刊行

陸軍軍医総監・陸軍省医務局長となる

明治42～大正5(1916)年 文壇再活躍時代

⇒最も「小説家」らしい時期

前半(大正元年まで)は「近代(=同時代)小説」を

それ以後は「歴史小説」を執筆



陸軍軍医時代の森林太郎(森鷗外)

『雁』の輪郭

初出:『昴(スバル／すばる)』

明治44(1911)年9月～大正2(1913)年5月

※「貳拾壹」まで断続連載

初版:『雁』靑山書店 大正4年5月

※「貳拾貳」～「貳拾肆」を書き加えて完成

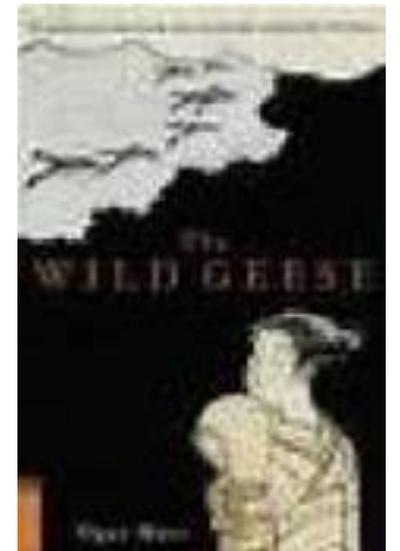
→①この経緯を意識して内容を見直してみると

※「雁」が登場しない、「貳拾貳」の書き出し、etc.

→②『雁』の位置付け

※「近代小説」と「歴史小説」を跨いで完成

※「明治十三年」という設定の意味



2. 森鷗外は小説家？—その3—

大正5(1916)年 『渋江抽斎』

→『伊澤蘭軒』『北條霞亭』と続く長編史伝の第1作

※抽斎は、ほとんどの読者にとって未知の人物

新聞連載小説としては失敗

同年4月 予備役となり陸軍軍医総監、陸軍省医務局長を辞す

大正6年12月 帝室博物館総長兼図書頭となる

→陸軍省から宮内省へ／高等官一等

大正8年9月 帝国美術院長となる

※明治40(1907)年の開設以来、つねに文部省美術展覧会の

審査委員会委員を務めていた

2. 森鷗外は小説家？—その3・つづき—

大正10(1921)年 臨時国語調査会会長となる

『帝諡考』(図書寮 3月)

→「仮名遣意見」(明治41〔1908〕年6月26日)

臨時仮名遣調査委員会第4回の席上における演説

文部省案を葬る原動力となった⇒任命は反論封じの戦術？

◎大正5年以降小説家としては読者の前から退場

→同年12月漱石没／「明治文学」の終焉と芥川龍之介の登場

◎二足どころか驚くほど多方面に活躍

→敢えて総括すれば「官吏(官僚)にして文学者」

『澁江抽斎』の問題

初出:『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』

大正5(1916)年1月13日~5月17日

→当時の読者にとって主人公「抽斎」は未知の人物

→史料に語らせる方法の問題

(=例えば漢詩・漢文を白文で引用)

→「正誤」の問題

(=スクラップでもしていない限り追跡不能)



※新聞連載小説としての工夫があっても読者には受け容れられず、計画していた単行本出版も実現せず。続く『伊澤蘭軒』『北條霞亭』も同様。同年12月の夏目漱石の死去と合わせて「明治文学の終焉」と意味付けられる。

『雁』誕生の背景—長編小説の試み—

①『青年』(『昴』明治43(1910)年3月～44年8月)

→漱石の『三四郎』に応答したビルドゥングスロマン

→主人公小泉純一は作家になり、「現社会」を「領略」した
小説を描くことを目指す

→「一応」の「終わり」

②『雁』(『昴』明治44年9月～ スライドNo.5参照)

③「灰燼」(『三田文学』明治44年10月～大正元(1912)年12月 中絶
未完)

→主人公・山口節蔵はニヒリストとして現代に登場

→乃木殉死以後の歴史小説とは共存不能？

3.『雁』について—主人公は誰？—

※主人公をめぐる議論がある

①お玉→読者の一般的な印象

「無縁坂の女」などの舞台化や映画化(高峰秀子主演など)もこのパターン

②岡田→本来の主人公であるはず(竹盛「擬制上の主人公」)

「窓の女の種姓は、実は岡田を主人公にしなくてはならぬこの話の事件が過去に属してから聞いたのであるが、」(「肆」)他

③僕→主人公になりたがっている(竹盛「潜在的主人公」)

「自分を岡田の地位に置きたいということが根拠をなしている」(「貳拾貳」)

3.『雁』について—『雁』は哀切な悲恋物語か？—

「一本の釘から大事件が生ずるように、青魚の煮肴が上条の夕食の饌に上ったために、岡田とお玉とは永遠に相見ることを得ずにしまった。そればかりではない。しかしそれより以上の事は雁という物語の範囲外にある。」(「弐拾肆」)

→では「青魚の煮肴が上条の夕食の饌に上」らなかつたら、
結果は違ったろうか？

→やはり岡田は洋行を選ぶ＝「一本の釘から大事件が生」じたのではない

※はかない恋のすれ違いを描いているのは、お玉に対する「僕」のいたわりをモチーフとする「雁という物語」。そのまま鷗外の小説『雁』のモチーフではない。

3.『雁』について—末造の存在と意味—

※もう一人の主要人物・末造

鷗外「金色夜叉上中下篇合評」(『藝文』明治35年8月)

(高利貸とは・酒井注)或る方面から現世間(=「十九世紀の紀末からこのかたの世間」)を代表するに最も適切なもの」

→ROLPHに扱えば「不属厭(あくことをしらないこと)が人間の本性」だから

◎従来「ピエロ」「コキユ」などと評価されるだけで、あまり注目されていない末造だが、「高利貸」という設定も、描かれているエピソードも正に「不属厭」主義の人物と言える

→資本主義経済システムの移入によって始まった「日本近代」を象徴する存在

3.『雁』について—岡田と末造の対比—

「僕は岡田ほど均衡を保った書生生活をしている男は少なからうと思っていた。学期ごとに試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではない。遣るだけの事をちゃんと遣って、級の中位より下には下らずに進んで来た。遊ぶ時間は決まって遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく帰る。」(「壺」)

→岡田は「試験の点数を争」うことをせず、「中位より下には下らない」自身の位置に満足して「均衡を保った書生生活をしている」

→末造とは対照的な「足ることを知っている」人物であり、「知足」という非「不属厭(=近代)」の象徴

3.『雁』について—お玉・末造・岡田—

「(「婿入」してきた)おまわりさんには国に女房も子供もあったので、それが出し抜けに尋ねて来て、大騒ぎをして、お玉は井戸へ身を投げるといって飛び出したのを、立聞きをしていた隣の上さんがようよう止めたということであった。」(「肆」)

→「おまわりさん」(=巡査)も明治(=近代)になって登場した職業

→末造の妾にならざるを得なかったことも含めて、お玉は「近代」に侵犯される存在

→ここに岡田に惹かれた深層の理由があるわけだが、「彼女を淤泥の中から救抜する」(「弐拾弐」)意志を持っていたのは「僕」(スライドNo.10参照)

3.『雁』について—深層にあるテーマ—

『雁』の真のテーマは、以上のような象徴的な意味を担った人物たちが活躍する「雁という物語」の向う側に、「今・ここ」の基盤をなす日本近代の初発期の姿を描き出すこと。

→「すばらしき自由競争の社会」として自立した個人によって形成される資本主義社会を導入したことの問い直し

※『学問のススメ』と『西国立志編』は青年たちのバイブル

→「末造」と「岡田」のバランスをとる方法を考えるような別の道はなかったか

※より望ましい「日本近代」を模索する姿勢

3.『雁』について—その現代性—

前葉に指摘した『雁』の深層にあるテーマは、例えば

斎藤幸平『人新世の「資本論」』（集英社新書 2020年）や

佐伯啓思『さらば、欲望』（幻冬舎新書 2022年）

など、最近際立ってきた資本主義の限界を指摘する論考に通い合う視点をなす。

→表層の物語に終わらない鷗外文学の面白さ

（≡鷗外文学の楽しみ方／漱石との違い）

→本当の面白さに気付けば、多くの鷗外作品が同様の現代性を潜めている

→「今・ここ」で鷗外を読む意味の在り処

4.『渋江抽斎』について—渋江保(1)—

渋江保(安政四〔一八五七〕～昭和五〔一九三〇〕)

教育者、ジャーナリスト、著述家、易学研究家。もと津軽藩儒医。名はもと成善。抽斎の七男にして嗣子。師範学校卒。慶應義塾修了。浜松中学校・愛知中学校・慶應義塾等に奉職。傍ら自由民権思想に共鳴、島田三郎の「東京横浜毎日新聞」編輯員や静岡の「東海暁鐘新報」主筆を務めたが、明治二十二年以後、博文館の著述家となり、一三〇余冊に上る啓蒙的著作を刊行。

(「人名注」『鷗外歴史文学集』第五巻 岩波書店 2000年1月)

→史料提供者として『渋江抽斎』の成立に大きな役割を果たしたが、以下に見るように少々気の毒な叙述もある。

→現在は「心霊学の紹介者」など別角度から注目されている

4.『渋江抽斎』について—渋江保(2)—

「渋江抽斎」—二

(「一三〇余冊に上る啓蒙的著作」について・酒井注)しかし最も大いに精力を費したものは、書肆博文館のためにする著作翻訳で、その刊行する所の書が、通計約百五十部の多きに至つてゐる。其書は隨時世人を啓発した功はあるにしても、概皆時尚を追ふ書估の誅求に依じて筆を走らせたものである。保さんの精力は徒費せられたと謂はざることを得ない。そして保さんは自らこれを知つてゐる。畢竟文士と書估との関係はミユチユアリスム(共生・酒井注)であるべきのに、実はパラジチスム(寄生・酒井注)になつてゐる。保さんは生物学上の亭主役をしたのである。(以下に保の未成の執筆計画・酒井注)

→近代資本主義社会における作者と出版社の関係

→父・抽斎のごとくあろうとしても、そうなれない保

4.『渋江抽斎』について—安政コレラ(1)—

コレラは元来インドのガンジス河流域とくに下ベンガル地域に盤踞していた風土病的性格をもった伝染病であった。それが一九世紀、近代文明の進歩とりわけ交通の活潑化とともに、国際交流の波に乗って文明諸国にお目見えしたのである。つまり、コレラ的世界的流行は、いふなれば世界の「近代化」の一現象といえる。

(立川昭二『病気の社会史—文明に探る病因—』

日本放送出版協会 昭和46年12月)

→「文政コレラ」と「安政コレラ」はともにパンデミックが日本に波及した結果だが、流行規模の違いは「開国」の影響

→「安政コレラ」は日本が国際化・近代化を志向した結果もたらされた

4.『渋江抽斎』について—安政コレラ(2)—

「渋江抽斎」五三

抽斎は…(中略)…修養して心身の康寧を致すことが出来るものと信じてゐた。抽斎は眼疾を知らない。歯痛を知らない。腹痛は幼い時にあつたが、壮年に及んでからは絶て無かつた。しかし虎列拉の如き細菌の伝染をば奈何ともすることを得なかつた。

→儒医としての抽斎の専門は痘瘡(天然痘)

漢方は痘瘡には一定程度対応できたが虎列拉に対しては無力

→「最も恐ろしい伝染病」のパラダイムチェンジ

→病氣観や医学についてのパラダイムチェンジ

→**抽斎の死は文化的なパラダイムの交代を象徴**

→**文化的パラダイムチェンジとしての明治維新**

(参照)手塚治虫『陽だまりの樹』

4.『渋江抽斎』について—矢嶋優善の意味(1)—

「渋江抽斎」四六

わたくしは此年(安政二年・酒井注)の地震の事を語るに先つて、台所町の渋江の家に座敷牢があつたと云ふことに説き及ぼすのを悲む。…(中略)…座敷牢は抽斎が忍び難きを忍んで、次男優善がために設けたものであつた。

「渋江抽斎」七四〔五百の言葉〕

(優善を・酒井注)晴がましく死なせることは、家門のためにも、君侯のためにも望ましくない。それゆゑ切腹に代へて、金毘羅に起請文を納めさせたい。悔い改める望の無い男であるから、必ず瞑々の裏に神罰を蒙るであらう…(下略)…

→江戸時代の優善は渋江一族の異端者として居場所がない存在

4.『渋江抽斎』について—矢嶋優善の意味(2)—

「渋江抽斎」九四

保は下宿住ひの諸生、脩は…(中略)…これも一戸を構へてみると云ふだけで矢張諸生であるのに、独り優(優善。明治四年に改名・酒井注)が官吏であつて、しかも此の如く応分の権勢をさへ有している。

- 一族で唯一人社会的責任能力を有している優善
- 江戸時代には「棄材」でしかなかった男が、明治になると人間性はそのままで彼なりの立身を遂げる
- 社会の価値観の変化により優善に対する評価が逆転した**
- 優善は維新という大変革やこの間に流れた時間の意味を開示する存在⇒「渋江抽斎」における歴史叙述の方法**

4.『渋江抽斎』について—『渋江抽斎』の正体—

(現在の歴史叙述とは・酒井注)古来宮廷のイントリグや戦争の勝敗なんぞばかりを書くのが忙しくて、それも粗筋をやつと書いて行くのだから、拿破崙がモスクワのクレムルで、鼻糞をほじりながら思案に暮れたとも何とも書いてはない。

(鷗外「大発見」『心の花』明治42年6月)

- 政治史や戦争(外交)史はあっても人々の生活や心の歴史はない、とする歴史観
- 『渋江抽斎』は上記の欠落を補う、人々の暮らしを再現しつつ歴史を叙述したテキスト
- 今日のアナール学派を先取りしたような「素人歴史家」の描いた「歴史」が達成した途方もなく斬新なテキスト